

かり考え、自分の権利ばかり主張し、自分さえ良ければよいと思っっているので、豊かになれば、それだけ箸がのびてますます消費生活に追われ、みんなで喰えない喰えないと言っ争い苦しんでいましたが、極楽では信頼される高い技術の長い箸で、みんなで相手のために与えあってにこにこ幸福に暮らしていたのです。今、苦しんでいる人がいるのは、自分だけが栄えればよいと思っっているから地獄になってしまったのだ。帰ったらそのわけをよくみんなにわからせて、伝統の生産力と技術力と働きの心の素晴らしい長い箸で、世界中の開発国や、相手国のためにつくして、日本も世界も平和な極楽浄土にしなければならぬ」と心に深くとどめて和尚さんは帰ってきました。

よろこびあう世界

大本山永平寺には有名な大きなすりがきがあります。そのすりがきにちなんだ門前の土産品であるすり

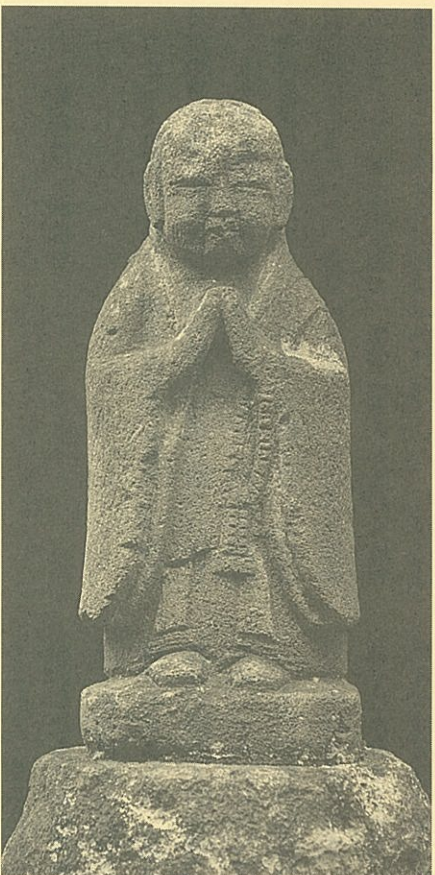
こぎようかんの包みに『身をけずり世のためつくすすりこぎの その味知れる人ぞ尊し』と書いてあります。それは『仏心とは自分のことはさておいても、世のため人のためにつくす心である。この心をおこせば、たとえ七歳の女の子でも、この世を救い導く大導師であり、慈父である』という道元禪師のおさとしをすりこぎになぞらえて詠んだものであります。

小は一家庭から大は全世界まで私たちが世のため人のためにつくす仏心をおこしましょう。親が子の幸福をよろこび、子が親の幸福をよろこび、夫が妻の、妻が夫の、兄弟が兄弟の、友達が友達の幸福をよろこびあったら、それがみ仏さまの極楽世界であります。経営者は社員や人々を幸せを願ひ社員は会社の繁栄をよろこび、政治家は国民の幸福をよろこび、国民は他国民の幸福をよろこび、人類が人類の幸福を祝福しあう、めでたい極楽世界を、まず我が家から建設しようではありませんか。新年にあたり『世のため人のため』の極楽世界をつくる一言を皆さまにお贈りいたします。 合掌

仏教法話

—心のひかり・人生のしるべ—

世のため人のため



利行は一法なり

今から半世紀ほど前に、駒沢大学から名誉文学博士号が当時の読売新聞社長の正力松太郎氏に贈られました。正力松太郎氏は深き仏教信者であり、特に曹洞宗の坐禅を修行された方で、その博士号授与式における記念講演に当たって、講堂の大学生に、高祖道元禪師のおさとしである修証義の一節の『愚人おもわくは利他をさきとせば自らが利はぶかれぬべしと、しかには非ざるなり、利行は一法なり、あまねく自他を利用するなり』という教えが、まちがいない正しい信仰の道であることをご自分の体験を通してのべられたのであります。正力松太郎氏が世のため人のためにつくせばつくすほど読売新聞が繁栄したというお話であり、どんな苦難が来ても仏道を信じて進むならば怖れはない。たまたま戦犯に問われて巣鴨の刑務所に監禁されたときも、何の不安もなく坐禅に精進して自己の信念をつ

らぬいた。聖い仏道のおしえこそ今日のような利己主義のしかも不安な世相をみちびき救うために是非ともひろめねばならないという結論でありました。道元禪師のおさとしは、『愚かな者は他人の利益を先にすれば自分が損をすると思つてゐるが、そうではない。世のため人のためにつくすことは自分のためと一緒であつて、それこそがあまねく自他に利益するのである。』という意味であります。たとえば商店ではお客さまの利益をはかりサービスにつとめれば繁盛いたします。経営者が従業員の幸せを願ひ、従業員は経営者と心を一つにして会社が回転すれば、お互いに喜びあい、自他共に利益するのであります。その道理がわからぬためにこの世はいよいよもめるばかりであります。

地獄極楽

ある和尚さんが、誰もが幸せな極楽に行くにはどうすれば良いかを知るために、地獄と極楽の視察に連れてほうほうのていで極楽へ連れて行つてもらつと、諸仏諸菩薩、十三仏様が出迎えて下さり、紫の雲がたなびく御殿があつて、みな蓮のうてなの上で、ありがたいう説教を聞いているのかと思つたらそうではなく、極楽にも地獄と同じようなレストランがあつて、テーブルの上には山のようなお料理が並べてあるありさまは地獄とそっくりでした。ただ違うところは、極楽では、みんなにこにこ笑顔で、健康そのものの姿であることでした。

極楽のみなさんがテーブルを囲んで食事を始めました。極楽の箸は短くて食べよいのかと思つて見ると、極楽の箸も地獄と同じように一メートルも長いのです。はて、地獄の人は、箸が長すぎて喰えないと嘆いていたのに、極楽の人はなぜ食べられるのだろうと不思議に思つて見ていたところ、極楽では、その長い箸で、お互いにテーブルの向こう側の人に「どうぞおあがりください」と差し出していたのです。それで、お互いにお礼を言ひあつて、にこにこして健康で暮らしていました。『なるほど、これでわかつた。地獄では自分のことば

行つてもらいました。まず、地獄に行きました。地獄には、針の山、火の海、血の池があると思つていたのですが、そのような景色は無く、何としたことか、地獄は食べるものも、着るものも、住む家もある豊かなところでした。大きなレストランもあつて、テーブルの上には、さまざまなお料理が山と並んでいます。そこで、案内人に「ここは極楽ではありませんか」と聞くと「いいえ地獄です」と申します。不思議に思つてみると、やせ細つた地獄の亡者たちが入つてきて、テーブルにつきましたが、みんな「喰えない喰えない」と嘆いています。目の前に山のような、馳走があるのだから食べればよいのに、なぜ喰えないのだろうかと様子を見てみると、地獄の箸は一メートルも長いのです。ですから食べようとしてはさんでも口に入らず、どうしても食べられないのです。地獄の亡者たちは、くぼんだ眼を怒らせて、しまいは、誰が悪い、彼が悪いとのしりあい、その長い箸で殴りあつたり、突き合つたりして喧嘩をする始末でした。そのあさましい姿は見えていられませんでした。